高山の文化を高めた人々

88

「山を愛し、人を愛した山岳写真家」

小池 潜

島田 靖
（小池氏の親友／登山家）

撮影中の小池潜さん
（2000年頃）

飛騨山脈（北アルプス）の交差点に位置する「双六小屋」は、登山者にとって極めて重要な存在である。小屋から1時間ほどの双六岳の山頂からは、指呼の距離に、鷲羽岳、水晶岳、黒部五郎岳をはじめ、槍・穂高、笠ヶ岳、乗鞍岳、白山などの名だたる百名山が一望できる。

その双六小屋を旗艦として、「わさび平小屋」「鏡平山荘」「黒部五郎小舎」を切り盛りしていた小池潜さんは、山岳写真家としてもよく知られている。樅沢岳から望む北鎌尾根を従えた槍ヶ岳の写真は、小池さんの写真が基となった定番の構図として定着している。

写真家としては、雑誌やカレンダー等に出品した後、日本の名峰シリーズ「雲ノ平・笠・裏銀座」を昭和六十年に初出版した。その後、「山の彩り」を出版した際には、高山グリーンホテルで盛大に出版記念会を催した。

この他に「黒部源流」「奥飛騨」そして大作「愛しき山稜」の計五冊の写真集をいずれも山と溪谷社から出版した。「愛しき山稜」出版の際は、東京・銀座で個展を開き、全国から多くの来場者があったと聞いている。

小池さんが撮影した作品の一部は、現在、平湯にある奥飛騨ビジターセンターに展示されている。

＊

双六小屋には、写真家や画家など多くの文化人が訪れた。小池さんが特に憧れを抱いていた田渕行男さんとは、撮影に同行したり、アドバイスを受けたりしている。また、日本画のような美しい写真で有名な前田真三さんからは、景色を見る目を教えてもらったと語っていた。

その他にも、白旗史朗さんや三宅修さんら多くの著名な写真家とも交流を深めた。作家の新田次郎さんと黒部の怪談について夜中まで話し込んだところ、さっそく「風が死んだ山」という短編にまとめられたのはさすがだと話していた。また、「花の百名山」の著者である田中澄江さんは双六の大ファンで、双六小屋入口の看板は、田中さんの揮筆である。

樅沢岳から望む北鎌尾根と槍ヶ岳

＊

小池さんは、旧上宝村吉野の小池家の次男として生まれ、大学を卒業すると同時に父・義清さんの経営する山小屋に入った。義清さんは村会議員を務めた人で、アララギ派の歌人でもあり、知性に富んだ人物であった。かつて双六小屋へは金木戸川を遡っていくしか道は無く、遠く不便なところだったが、義清さんは新穂高から左俣谷を通る道を自ら開拓し、「小池新道」と名付けられた。

昭和四十年、鏡平の神秘的な風景に惚れ込んで小屋を作り、昭和六十三年には西糸屋より黒部五郎小舎を譲り受け、合わせて四つの小屋を経営するに至った。これらの小屋をもっと多くの人に楽しんでもらおうと、小野木三郎さんたちと企画し、「双六山楽共和国」を立ち上げたことは、私自身にとっても楽しい思い出である。

小池さんは、スキーの指導者でもあったが、ゴルフも大好きで、山仲間とプレーすることを楽しみにしていた。

現在、四つの山小屋は、長男・岳彦氏が父の遺志を継いで、三代目として経営している。どの小屋も工夫を凝らし、近代化を図ってきれいで快適であり、食事が美味しいと評判で、全国から多くの登山者が訪れている。

多くの登山者で賑わう双六小屋

小池潜さんは、登山者をいつも温かく出迎え、山をこよなく愛し、人を愛し、そして誰からも愛された山岳写真家であった。

（令和五年十一月二十九日没）